

くの商人ども、新羅の人のいふをき、てかたりければ、つくしにもこの國の人の兵はいみじきものにぞしけるとか、

〔吾妻鏡〕四元曆二年元治六月十四日乙丑、參河守範賴并河内五郎義長等受二品朝命、渡使者於高麗國之間、對馬守親光歸著彼島云云、略○中去三月四日、令越渡高麗國之時、相伴妊婦、仍構假屋於曠野之邊、產生于時、猛虎親來、親光郎從射取之、訖、高麗國主感此事、賜三箇國於親光、已爲彼國臣之處、有此迎歸朝伴國主、殊惜其餘波、與重寶等、納三艘貢船、副送之云云、

〔羅山文集〕四十五南山刀銘并序

日者、豐臣相國之討高麗、包茅不共之罪也、黑田筑州刺史從命而刊朝鮮之壘、一日會虎食人、見者聽者無不恐懼而奔、躑躅踏當是之時、刺史之從事菅忠利與其卒二人自當之、一人乃虎嚙肩而擲之、一人又噉其腕而倒之、於是乎菅忠利乃前奏刀擊斬虎、虎嗥而斃、遂爲兩、是行也、若非其人之壯勇、其刀之利銛、幾不免虎口哉、由此實其斬虎之刀而藏之、往歲使人需余其名、因號之南山、蓋取諸晉周處殺白額矣、今亦价人索其銘、余敢不諾、价者固請愈謹、至再三不止、余雖未識忠利、因价者之懇到、以作銘、且序所聞於右、銘曰、

節彼南山、山惟劔鋒、苛政除去、酷吏逃藏、截邪斬佞、惟刀在箱、惟其言虎失色、有若眞傷、傳之萬世、爲子孫常、

〔常山紀談〕十朝鮮にて何れの所にてか有けん、清正の陣大山の麓なりけるに、虎夜來りて馬を中に引さげ、虎落の上を飛出けり、清正口惜き事なりと怒られけるに、小性上月左膳をも虎來て啗殺せり、清正夜明ると山を取卷て、虎を狩たるに、一疋の虎生茂りたる萱原をかきわけ、清正を目がけて來る、清正大なる岩の上にて、鐵砲を持ねらはる、に、其間三十間計、虎清正を睨みて立止る、人々鐵砲を揃て搏んとするを、清正下知して打せられず、自打殺さんとの志なり、斯て虎間